



# MAKOTO

YOUNG BUDDHIST ASSOCIATION MAGAZINE

*no.150*



「間」

物体と物体の間にあるもの。空間。

事象と事象の間にあるもの。時間。

あなたと私の間にあるもの。人間。

普段あまり意識しないもの。

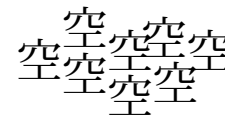
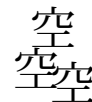
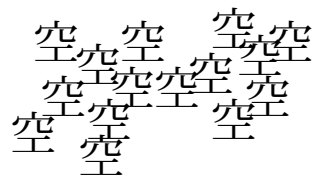
それが「間」。

あってもなくてもよさそうなもの。

それが「間」。

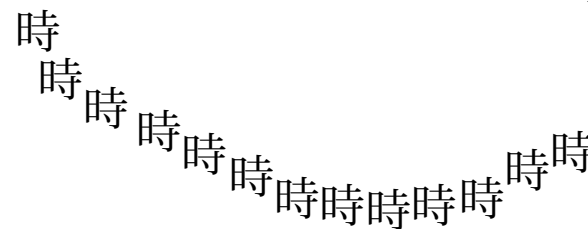
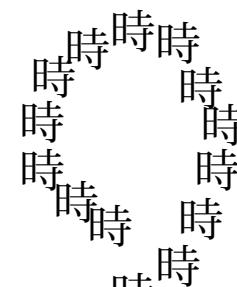
でも、もしも「間」がない世界があったとしたら・・・。

私たちはその世界で生きることができるのだろうか？



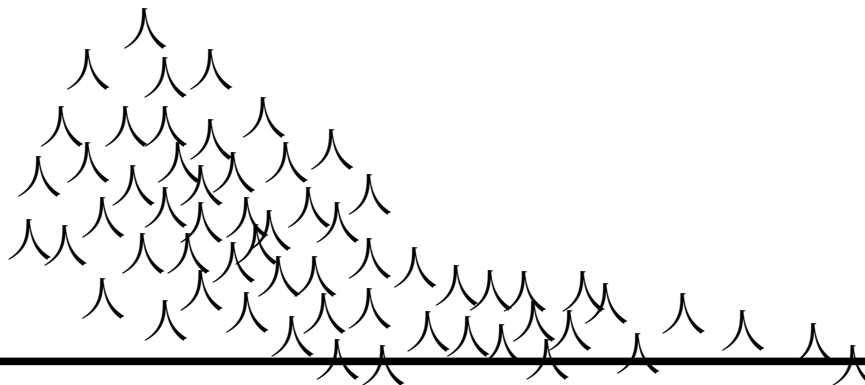
テーマ

# 間



## CONTENTS

- ④ 無間地獄
- ⑧ 念仏空間
- ⑨ 休憩時間
- ⑩ 中央研修会
- ⑫ 全国真宗青年の集い熊本大会
- ⑮ 編集後記
- ⑯ 全国真宗青年の集い北海道大会



# 無間地獄

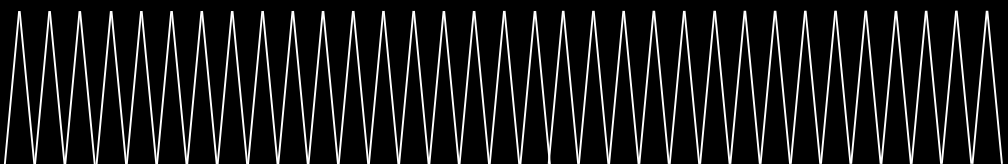


「間が無い」世界のことを考えたことがありますか？ 仏教では間が無い世界を「無間地獄（むけんじごく）」と説いています。地獄の中でも最も恐ろしく、またの名を「阿鼻地獄（あびじごく）」とも言います。これは梵語（ほんご）、インドの古い言葉のサンスクリット語（の当て字で「間断のない苦しみに責め苛まれる」という意味です。この地獄は非常に広大で、七重の鉄壁に囲まれ、七層の丈夫な鉄の檻が巡らされ、逃げ出すことなど絶対にできない構造になっており、その周りには刀が林のように突き立っているとされています。また地獄の四隅には、巨大な銅でつくられたな癡猛（ごつもう）な狗（いぬ）がいます。頭は怪獣、口に夜叉、目は六十四あって稲妻のような光と雷のような大音響を発射することにも、機関銃のように鉄球を発射すること。牙は剣よりも鋭く、天蓋を突き破るようにそそり出て、舌は鉄のトゲを思わせ、毛穴のすべてから猛火を吹き出し、そこから発せられる煙と悪臭は他に例える物がな

いほど酷いものです。それぞれのブロックには、鉄や銅が熱く沸きたち、八万四千匹もの大蛇（毒蛇）がとぐるを巻いて待ち受け、五百億匹の毒虫が嘴（くちばし）を尖らせて罪人を待つとも恐ろしい場所が地獄なのです。

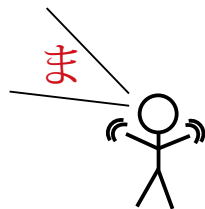
「無間」という字を調べてみると「たえまないこと、間断のないこと、ひっきりなし」と出ています。「無間地獄」の世界は、苦しみが途切れることなく続く世界なのです。私たちの生活も、朝起きて、勉強や仕事に精を出し、休むことなく一日の生活を送っていると苦しみがどんどん増してきます。しかし、「間」というホッと息つける空間や時間があるからこそ、一日の生活をすこやかに送ることができるのです。

「間」が無い世界にはとても住めそうもありません。普段の生活の中ではあまり考えることがない「間」。私たちは「無間地獄」を作りながら生きてはいないか、たまには再確認する必要があります。





## お念仏×空間



一切の生きとし生けるいのちを悉くお浄土へ往生させる仏さま、それが阿弥陀如来である。その阿弥陀さまのご本願を「南無阿弥陀仏」にことよせてお示しくくださった親鸞聖人。その親鸞聖人がいらつしやる御堂が「御影堂」。

堂内下陣は横二十一間（注1）大きな大きな畳の広間。下陣が広いのは大方浄土真宗の寺院の特徴である。多くの門信徒が集えるように造られている。

「御影堂」は創建以来、親鸞聖人を慕う先達が、途切れることなくお参りをし、お勤めをし、阿弥陀さまのお話を聞き、手をあわせ、そしてお念仏を申してきた。

三百七十年余の長い長い年月。何万人何億人ものお念仏が吸い込まれているこの空間。ここに身を置くだけで心が落ち着く。まるで私の生まれるずっと前から、私の居場所が用意してあったかのごとく。御影堂はそんなことを感じさせてくれる空間だ。

文・野口哲城



# 時間 × 寮 × 人間 × 空間



今年の4月、僧侶になるため、京都にある中央仏教学院という浄土真宗本願寺派の専門学校に入学しました。私は通学のためその学校の寮に入りました。この寮には下は18歳の高校を卒業したばかりの者から、上は60歳の方まで住んでいます。

この寮には大きな決まりが二つあります。一つは、『二人一部屋』ということ。部屋割に年齢は関係なく、さまざまな年齢の人間が一つの部屋に暮らしています。二つめは、『時間厳守、日課厳守』です。毎日のスケジュールは分単位できめられています。

ここでの生活を送る中で、とても大切なことは「間」を

認識することです。まず、さまざまな年齢の人と生活するために礼儀が必要で、それが人と人の間のクッションになってくれます。

また狭い空間に一緒に生活するためには、相手との違いを認識して尊重する「間」が必要です。尊重という「間」は豊かな空間を作ってくれます。

そして分単位のいそがしいスケジュールの中で大切なのは休憩です。休憩という「間」を大切にすることによって余裕が生まれ、講義に集中することができず。

私たちには「間」が必要です。皆さんも「間」を大切に。

文・上高原直樹





## －被災地のいまを感じる－

第60回中央研修会  
～全国に支援活動を広めよう～

平成25年8月23日から25日の三日間で第60回中央研修会が行われました。今回の研修会は「被災地のいまを感じる」全国に支援活動を広めよう！というテーマのもと、東日本大震災の被災地である仙台市に復興ボランティアへ行かせていただきました。三日間で主に現地学習、ボランティア活動、学習会の三つが研修の内容でした。

その中でもっとも印象に残っているのがボランティア活動の際に訪れた地区のことです。その地区は実際に5メートルを超える津波の被害をうけた場所で、初めてその景色を見たとき本当にそこに家があったのだろうかというのが正直な気持ちでした。周りを見渡してもそこに家な

どはなく、あるのは家があったであろうという場所に生えた草だけでした。今までテレビや新聞などのメディアを通してみてきた光景と実際にこの目で見た光景というのは全く違うもので、本当に復興できるのだろうかと思っていました。

しかし、それと同時に今自分に出来ることはなんのだろうと考えられました。今私たちに出来ること、それは被災地の現状を自らの目で確かめることなのではないかと思えます。今の現状を身をもって感じ、それをより多くの人に伝えてほしいと思います。そして、震災のことを記憶として残し決して忘れないでほしいと思います。

文・畦森真仁

# 本当に「大切にする」ということ

2013全国真宗青年の集い熊本大会を終えて  
文・杉本真樹子

先日行われた、全国真宗青年の集い熊本大会の実行委員長を務めた杉本です。多くの方にご参加頂き、本当にありがとうございました。熊本仏教として大会を準備・開催し無事終える事ができホッとしています。

大会のテーマ「本当に『大切に』にする」ということ。大切にされる・・・。漠然としたイメージになるこのテーマですが、そこに含まれている伝えたい事をどうやって伝えるか、勉強会や会議を繰り返して、沢山のスタッフの力を結集し当日を迎える事ができました。

すべて生演奏で行った開会式の音楽法要。気持ちを引き締まった後の基調講演では、熊本にしかない「このとりのゆりかご」を設置・運営している、慈恵病院の田尻看護部長に「このとりのゆりかご」の実態と状況、その思いに

ついて話していただきました。実際には知らなかった「このとりのゆりかご」のリアルな話が聞けたのではないのでしょうか？

基調講演での話を基に「このとりのゆりかご」になぜ預けなければならぬ人がいるのか。それを上野千鶴子さん、雨宮処凛さん、栗山俊之さん、田尻由貴子さん、コーディネーターの宇治和貴さんに、それぞれの専門分野から討論して頂きました。内容は大変濃く、沢山の情報が出てくるので考えが追いつかない所もあったと思います。ここではまとめられません。とても充実したパネルディスカッションでした。

その後、移動し夕食交流では、三味線奏者の高崎裕土さんと和太鼓奏者の西口勝さんによる生演奏と共に夕食を頂きました。そして、テーブル対抗クイズ大会！皆さん

真剣に楽しんでくれました。次の日は朝のおつとめをし、1日目の内容を踏まえ栗山さんより問題提起があり、グループディスカッションを行った中でいろいろな意見が飛び交いました。そして、栗山さんによるまとめの法話で締めてもらい、閉会式を行い大会は終了しました。

勉強会を何度も重ねなければならなかったテーマを、たった2日間で参加者の皆さんにお伝えする事は不可能に近いです。ですが知らない事の危うさを、その結果誰かを傷つけている可能性がある、という事を私はこの大会を通して気づきました。価値観が変わる事は中々ありませんが、この大会で学んだ事をもとに、普段見聞きする情報の中から、自分が本当に大切にしなければならぬことを見つけていきたいと思えます。







上 高原 直 樹  
Naoki Kamitakahara

非常に寒い時期となってまいりました。今年度も残りわずかとなってきましたので、何か目標を立てて生活していきたいと考えています。次回作のMAKOTOもお楽しみにお待ちください！！

編 集  
後 記

海 野 康 成  
Yasunari Unno



今回の makoto のテーマは、『間』でした。編集後記を書いていた時期は、私自身非常に仕事が忙しく、正直言って「間」がほしいです。休憩がほしいです。皆さん、ゆっくり休める時は、ゆっくり休みましょう。あー、「間」がほしい。



野 □ 哲 城  
Tetsujo Noguchi

今回でこの冊子も 150 号となりました。創刊、継続、それについての会議や原稿の積み重ねが何度も何度も繰り返したものでしょう… 機会があって、そう云ったことに関わっていたことを今思いつつ寄稿させて頂きました。

田 中 慎 也  
Shinya Tanaka

今年の夏秋は、灼熱地獄のような猛暑と想像を絶する多くの天災災害というまさに両極端の季節でした。自然の猛威を目の前にして、人間はいかに無力か改めて思い知らされました。季節は移り変わり、まもなく新しい年を迎えます。2014 年がみなさんにとって素敵な一年になりますように。



巖 根 眞 弥  
Shinya Iwane

こんにちは。巖根です。私事ですが最近ランニングを始めました。まだ三日目ですが、間が空かないように頑張ります！寒い！

## 彼國の便り

自分さえ良ければという考えは、孤独になる道と気付かせてくれたのは祖父でした。祖父が余命三カ月と宣告を受け二ヶ月目、米寿のお祝いをしました。当日、衰弱きつっていた祖父は乾杯前にお礼の言葉を述べ早々に退席することになりました。「八十八年もの間、数え切れない方々、いのちに支えられ、ただただお陰様です」と。続けて「同時にどれだけの方々を傷つけ、いのちを奪ってきたのかと思うと身震いがし、ゾツとします」とやつの声で話しました。座ることもままならず支えられながらの最後の短い言葉でした。

に支えられ、多くのいのちを頂いたからこそこの私がいるということ。阿弥陀如来様がお前を一人にしない、いつも側にいるという願いは、この私のためだったというただただお陰様と喜んだのです。しかし同時に、この私は多くのいのちに支えられ、いのちを頂いておきながら、言葉や態度で多くの方々を傷つけていた。生きていくためとはいえ、たくさんいのちの犠牲の上に自分がいたと知らされたのです。この私は申し訳ない身であつたと身震いしゾツとする程の祖父の慚愧の言葉だったのです。阿弥陀如来に照らされ、育てられた祖父の八十八年の人生が、私に多くのつながりと大切なものを教えてくれたのでした。

文・帆足一洋

(仏青連盟指導講師)



# 2014年 7月予定 in 北海道 全国真宗青年の集い

# 大自然



仏青よ未来を描け！

※写真は北海道のイメージです。

熊本⇒北海道へ

問い合わせ先：お近くの浄土真宗本願寺派のお寺、もしくは教務所まで。 <http://hokkaidokyomusho.jp>

主催：浄土真宗本願寺派仏教青年連盟 担当：北海道教区仏教青年連盟